152号
Summer
2020
まごころ
孫
子
老
全国まごころケアネット

滝

CONTENTS

巻頭言　「ありのまま老いる」　1

孫子老だより　～健康管理はユーモアと笑いで～　2～5

センターだより　6～11

寄稿「戦争体験を継ぐ」　12～15

事務局通信　16

ありのまま老いる

特定非営利活動法人
日本ケアシステム協会
会長　兼間 道子

言い表せないほどの絶景を目にしたとき、ああ何と美しい青葉なのだろう。この澄み切った空、新緑をいつまで観られるのだろう。若いころは、自然の情景に無頓着だった。今ほど惹かれてなかったように思う。

老いを重ねるほど年齢を増すごとに、自然の風景が私の心を揺さぶる。心地よい空と木漏れ日が優しく頬を撫でる時、思わず「ありがとう、ありがとう」と瞼を閉じて満たされる。常には、執筆に追われ講演に急かされ、梅干しの漬け込み作業もやる（今年の梅は格別に大きく豊作）。さらに、誰にも相談できない難題を抱えると、一点を見つめたまま「神様、早めにお迎えに来て下さい」と頼んだりする。

日々、その都度、笑ったり、嬉しくなったり、悲しくて泣いたり、我慢できずに怒ったり、愛おしくてうっとりしたり、時に感極まって涙が溢れるほど感動したりする。

繰り返しの失言、しばしば暴言もある。迷惑も顧みないで醜さも露呈しながら愚かな時を費やすことも少なくない。

けれど、山々を眺めていると、一切のことを洗い流し忘れて、まだまだ生きていたいと癒されたりする。

死ぬその時まで、ありのままの自分を受け入れて、できるだけネガティブにならないようにイライラせずに歩みたい。

できるかしら。

孫子老（まごころ）だより

健康管理はユーモアと笑いで

新型コロナの影響で、不自由な生活が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。日々、介護の現場で感染対策をしながら、職務に奮闘されている皆様に心より敬意を表するとともに感謝申し上げます。一日も早く事態が収束し、安心で安全な日が来ることを祈っています。

また、今年も暑くなりそうです。熱中症対策についても適度な水分補給と休憩、冷房をしながら夏を乗り越えましょう。また警察官がマスクを着用しているのを見かけますが、その体験に基づく「眼鏡をかけた人のくもらないマスクの付け方」と「耳が痛くならないマスクの付け方」のウラ技が警視庁のホームページで紹介されています。参考になりますので一度見てください。

画面を見るたびにマスクの大きさが気になるアベさんと、やたら横文字を使いたがるファッショナブルビッグマスクのコイケさんですが、発注前に小学生の給食当番がするようなマスクをコイケさんに見せて意見を聞かなかったのでしょうか？

大学入学三日目からステイホームの二男がようやく帰り、久しぶりに夫婦水入らずになりましたが、決して「密」にも「蜜」にもなることなく、コロナのはるかかなたよりソーシャルディスタンスを保っている我々夫婦は、今日の状況にも問題なく順応しました。テレビは、相変わらず再放送ばかりで以前のように見ることもなく、それで夫婦の会話が爆発的に増えたかと言うと、そうでもなく、今年初めて植えたスイカの赤ちゃんの成長を孫のように語り合うのが夕食のテーマになり、10万円給付までは一品多かったおかずも、愚妻に贈呈後は、一品減るどころかセルフ方式に変更になり、なぜかと問うと新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式だ。」とのこと。私が頂けるはずの給付金は、その御姿を拝むことなく次男の自動車教習代にお消えになられました。高齢の母が、「私は、思い残すことも無いので、いつ死んでもいい。身の回りの片づけは、終わっている」と毎回のように語りながら「コロナでは、死にたくない」と付け加えるようになりました。買い物に行けばマスクとレジ袋持参は、当たり前になり、世の中が、少しずつ変わり始めたのを実感いたします。

このような状況ですが、心がホッとして、目頭が少し潤っとなりそうなエッセーを見つけましたので三編ご紹介します。いずれも「二十四の瞳岬文壇エッセー募集」で入賞された作品です。

第十三回　優秀賞

「ありがとう」「おやじの弁当」

中尾　則幸

妻が五十一歳で亡くなってから十五年。妻が遺した「お料理ノート」は、油や醤油の染みで表紙がすっかり薄汚れている。それは闘病中の妻が病床で、夕食と弁当用のレシピを書き留めていたものだ。カレーライスに始まって豚汁・肉じゃが・ハンバーグ・そしてコロッケ……。

妻の病状は乳がんだったが、骨に転移、さらに肝臓にまで襲いかかった。

主治医からは余命三ヶ月と宣言されたが、私は〝奇跡〟を信じ、最後まで妻や子どもたちには隠し通そう

と心に誓った。

しかし、かつて看護師だった妻は、「覚悟」を決めていたのかも知れない。

頸部をコルセットで固定された体を起こし、妻は何かに憑かれたように毎日、ノートにボールペンを走らせた。容態が急変するのに怯えながら、私たち夫婦の会話の大半は、食事や息子に持たせる弁当のことだった。

スーパーマーケットの買物レシートを見せると、妻は喜んだ。

「あら、きのうは豚汁作ったの?」

「どうして、わかる?」

と私が訊く。

「だって、ゴボウとコンニャクも買ってるでしょう」

と、妻はまるで謎解きの私立探偵のように、得意気に笑みを浮かべた。結婚して二十五年。私たちにとって、それは新鮮な会話だった。しかし、長くは続かなかった。

札幌に初雪が降った日、妻は旅立った。妻の「お料理ノート」は、私への〝遺言〟となった。

火の消えたようなわが家では、男三人暮らしが始まった。妻の遺したノートを頼りに私は台所に立った。初七日（しょなのか）の夜、思い切って、手間のかかるコロッケを作ることにした。会社の仕事を早めに切り上げて、妻の赤いエプロンに腕を通した。ノートに記された手順を追って、玉葱をみじん切りにする。匂いがガツンと鼻孔を刺激し、眼にしみた。涙が、じわっとあふれてきた。コロッケは妻の定番料理だった。しかし、この日の〝おやじのコロッケ〟は無残な姿だった。ひび割れして、表面はまるで噴火口のようではないか。

その時、妻の遺影が私に語りかけてきたような気がした。

「じゃがいもの粉吹きを忘れたの?油の温度が低すぎなかった?」―。

久しぶりに二人の息子と食卓を囲んだ。

「見てくれは悪いけど、味は母さんのだよ」

と、サラリーマンの長男は私を気遣う。高校一年の息子は、

「これ、マジで弁当にも入れるの?」

と訊いた。

「いやならいいんだ。コンビニの弁当、そんなにうまいのか」

私は声を荒げた。息子のヒロは「ふうん」と言ったきり、私の〝苦心作〟を無言で口に運んだ。

とにかく、息子が高校を卒業するまでの二年余り、私は弁当を作りつづけた。弁当のおかずも、レンジで温める冷凍ものが徐々に姿を消し、おやじのオリジナルで占められた。いつしか、息子が完食した弁当箱のふたを開けるのが、私の楽しみに変わった。

卒業式を目前にした三月初め、息子の高校生活最後の弁当もコロッケにした。朝、雪の中を小走りでバス停に向かう息子の後ろ姿を窓越しに見送った。弁当作りから解放される安堵感と一抹の寂しさが、胸の奥でからみ合った。

妻が育てた庭のレンギョウが今年も鮮やかな黄花（きばな）を咲かせた。

夜、息子の弁当箱が台所のテーブルに置いてあった。ふたを開けると、小さなメモ書きが入っていた。

「おやじ、もう無理すんなよ。ヒロ」

それは息子が私にくれた、精一杯の感謝の言葉なのだろう。目頭が熱くなった。

「こいつ、〝ありがとう〟って言えないんだな。やっぱりオレの血を引いて」―。

私は、メモ書きを「お料理ノート」に貼りつけ、遺影の妻に掌（て）を合わせた。

第十六回　優秀賞

「電話」「心をつないだ公衆電話」

高橋　順男

「じいちゃん、おたんじょう日、おめでとう!これからも元気でね!!」

孫からのメールを覗いて、慣れぬ手つきで返信メールを打った。本当

なら抱き上げて「ありがとう」といいたいところだが、今の時代、これが当り前なのだろう。

携帯電話を閉じて、ホッと茶を啜る内に、ああ私はまた、あの公衆電話の出来事を思い出した。もう遠い昔の話なのに……。

私が小学校四年生の夏、母は病気で亡くなってしまった。それからは父と私の二人の生活がはじまった。朝御飯を作り、洗濯をして、工場（こうば）へ向かう父の姿を見て、私は幼いなりに何か手伝わなくてはと、いつも考えていた。学校から帰ると、洗濯物を竿から取り入れ、父の帰りの遅い時は、味噌汁らしいものを作って、父の帰りを待った。

この様な生活が二年余り続いたある日、父は突然、

「引越しするぞ。明日、学校へ行って転校の手続きをしてくる」

と一方的に告げるのであった。私は驚いて、

「なぜ?」

と尋ねると、

「お前の新しい母さんが見つかったんだ」

と一言いうだけだった。

引越し先は、すぐ隣街だった。アパートの二階の一番奥のドアを、父はノックした。ドアが開いて、父の後ろについて部屋に入ると、綺麗に化粧をした女の人が、優しい笑顔で迎えてくれた。隣には十歳位の女の子が、きょとんとして座っていた。

父は、

「順男、今日から、お前の母さんだ」

と私にいって、女の人にちょっと目をやった。彼女は、

「まあ、男前だね」

と微笑んだ。そして父は、

「この子は、清子ちゃん。仲良くしろよ。お前の妹だ」

と女の子の肩に手をやった。清子は黙って私を見つめていた。

そして六か月程過ぎた頃、夕食の時、父は、

「もう、そろそろおばさんじゃなく『母さん』と呼んだらどうだ」

と私にいうと、コップに残っていた酒をグッと一気に飲んだ。おばさんは、

「無理に『母さん』と呼ばなくていいのよ」

と笑顔でいった。清子は、

「私の母さんのこと『母さん』と呼んでいいよ」

といって、寂しそうに俯いた。しかし、私は何度も『母さん』と呼ぼうと思ったが、清子の寂しい目を思い出すと、言えずに、いつまでも『おばさん』

と呼んでいた。

おばさんは、夕方になると、近くの料理旅館へ三味線を持って、美しい着物を着て出かけて行った。主人を事故で亡くし、清子と二人暮らしであったが、父と再婚後も三味線を抱えて出かけた。小さな菓子工場を遣り繰りする父の支えになって働いた。私は子供心にすまないといつも思っていた。

それから、六年の歳月が経った。私は高校を卒業することになった。夢だったコックになるため、東京のホテルに就職が決まった。当時、新幹線はなく、夜行列車で名古屋駅を出発することになった。私の希望で見送りはなく、ひとりホームにやってきた。

二十三時の出発時刻まで、あと二十分程あった。私は公衆電話に小銭をいっぱい入れて、家に別れの電話をした。父に続いておばさんが出た。今まで育ててくれた感謝の気持ちを一生懸命に伝えた。そして、最後に一言、今日まで言えなかった『母さん』を、電話でいうのだと心に決めていた。しかし、口元まで出かける『母』の言葉が詰まっていい出せなかった。

突然、受話器からブザーの音が響いた。通話料金が間もなく切れる合図である。慌ててズボンのポケットに手を突っ込んだが、小銭は無かった。私は、その時、咄嗟に「母さん！」と叫んだ。受話器の向こうで「順男、ありがとう」の声のあと「わーっ」と泣く声が聞こえた瞬間、電話は切れた。……六十年も前の出来事が、

きのうのように蘇った。

慌しく着信音が鳴った。開くと「御誕生日、おめでとう」の文字が、寂しく画面に並んでいた。今度は、娘からのメールだった。

第十七回　優秀賞

「誕生」「愛子とヒマワリ」

青島　ゆかり

ずっと待ち望んでいた子供がダウン症。私はこの現実が受け入れられず、産院のベッドから起き上がられずにいた。他のお母さん達のはずんだ声を聞くのはつらかった。私だけが笑い声や暖かな陽だまりからとり残された気がしていた。

そんなある日、産院へやって来た夫が私の手をとって言った。

「手のかかる赤ちゃんは、きっと優しい人を選んでやって来るんだよ」

と、私は思わず首を振り、

「それは違う。私は優しくなんかない。普通の赤ちゃんに来て欲しい」

と、叫んでしまった。すると夫は続けた。

「今日から優しい人になろう。赤ちゃんに寄り添って」

その時、私は号泣してしまった。もうそれからは夫の温かな手の記憶しかない。私はその夜、夫の腕の中で一生分の涙を流したかもしれない。

そして翌日、ふと窓の外を見ると黄金色のヒマワリが見えた。ヒマワリは輝いていた。すくっと立って青空に挑むように神々しかった。そのヒマワリを見つめながら私達は、赤ちゃんの名前を愛子と決めた。

私達の娘の愛子は、今年で四十歳になった。この四十年間、私は毎年愛子と春にはヒマワリの種をまき、夏にはヒマワリを家族でながめた。

私は、ヒマワリをながめながら愛子に言ってきた。

「愛ちゃんのおかげで、ママは優しい人達に出会えたの。世の中は優しい人でいっぱいだって初めて知ったの」

特別支援学校の吉田先生。愛子のよだれでべとべとのクッキーを平気でおいしそうに食べてくださった。私は他人にこんなに優しくできる人を初めて知った。ありがたい。

そして愛子。私が風邪をひいて寝ていると、心配そうにやって来ては、私の手を握ってくれた。私は、それで元気になれた。ありがたい。

そんな愛子と来年もヒマワリを植えよう。気が付けば、もうすっかりオバサンになってしまった愛子。来年もヒマワリの種を作業所の先生やお友達に配るのを楽しみにしている愛子。無邪気なものだ。

正直、不安で押し潰されそうな日もある。私や夫が亡くなった後、愛子はどうなるのだろうと……。

でも、きっときっと優しい人達に囲まれて暮らしていけると信じている。だって私でさえ愛子の親になれて少しは優しくなった。それに愛子には人を優しくさせる力がある。

来年も、まちがいなくヒマワリは咲いてくれる。私はその花を見ると、元気が出る。生きていく勇気が湧く。

この四十年間、優しい人にいっぱいいっぱいめぐり会えたけど、ヒソヒソ声やナイフのような鋭い視線にも出会った。でも、春にヒマワリの種をまき、夏に大輪の花の下でダンスを踊る愛子を見、秋に作業所の人達の顔を一人一人思い浮かべながらヒマワリの種を袋詰めしている愛子を見ていると、悲しいことなど忘れられた。

愛子の誕生から四十年。もし障害者の母親にならなければ、私はもっともっと傲慢で人の痛みや、人の優しさを知らない人間だったかもしれない。愛子こそが私に〝人として大切なもの〟を教えてくれたのかもしれない。

あの産院で見たヒマワリが青空に挑んでキラキラと黄金色に輝いていたように。

みなさまが健康で長生きできますように心よりお祈り申し上げます。いつの日か穏やかで平穏な日常が必ずやってきますようみんなで頑張りましょう。

孫子老太郎

センターだより

まごころケア塩釜

午後のたのしみ増えました

スタッフ　志摩　弘子

新型コロナウイルス対応に気の抜けない日々が続いていますが、まごころ塩釜のデイサービスでは、月曜日と土曜日の午後二時過ぎになると、コロナ禍を忘れてくれるような爽やかなメロディが流れだします。それは、今年の五月から調理員スタッフとして仲間入りしたKさんの奏でる大正琴のなんとも心地よい音色なのです。Kさんは大正琴奏者としての経験は長く現在は指導者としても活躍されていますが、利用者の方々の好きな民謡・童謡・演歌など、リクエストにはなんでも応えて弾いてあげたいと今、努力されています。利用者の方々も大正琴の音色が流れると自然に歌う準備に入り、Kさんの「はいっ」の掛け声とともに元気良く歌い出します。

ちなみに坂井センター長も八十の手習いとして、自己流で練習しております。まだまだ弾けるようになるまでには時間がかかるようですが独奏できるよう頑張って居るようです。楽しみです。

利用者の方々はもちろん、私たちスタッフの心もやわらげてくれる音楽の力で、免疫力を高めていきたいものです。

まごころケアサービス福島センター

ワンチーム・まごころ

NPO法人まごころ・どんぐり学童クラブ
管理者　安齋　健蔵

賃料を支払いながら開所していた、NPO法人まごころ・どんぐり学童クラブが今年度（四月）より法人の所有地に移転しました。

今度の場所は、とても広大な土地で、池あり花壇あり竹藪あり畑ありと子供たちにとっては、とても環境に恵まれたところです。

また、ここは福島市のチャレンジ認定ガーデンになっています。

移転にともない、環境整備のス

タッフが、危険場所にロープを張り巡らし、子供たちが伸び伸びと遊べる工夫をしました。

とても環境的には良いところですが、大変困難なこともありました。移転に伴い、以前のスタッフが殆ど辞めてしまい、新しいスタッフで一から運営を始めました。そこへ、新型コロナ騒動が加わり、学校の休校、朝からの開所等、一日一日を乗り切ることで精一杯の日々が続いています。

六月になり休校も解除され、通常の学童クラブ運営となりましたが、よくここまで頑張れたなという思いで一杯です。

今年の初めに、法人では「ワンチーム　まごころ」のスローガンを掲げ事業計画を策定しました。そこへ、新型コロナ騒動が勃発し計画通りに出来ないでいますが、学童移転に伴う大変な時期に、「ワンチーム　まごころ」の力が発揮されました。先ほど述べた、環境整備のスタッフをはじめ、法人一丸となり学童運営に協力いただいております。

学童の状況について述べたいと思います。

広い室内では、アイロンビーズ（ビーズを自由に並べ、アイロンをかけて成型する）、段ボールを使った工作、積木、ままごと遊び、折り紙、塗り絵、マットを組み立てて、思い思いの家のようなものを作ってのままごと遊び、それから、室内でのかくれんぼ、トランポリン等、数えたらきりがありません。

外では、竹藪でのタケノコ採り、池でのアメンボウやオタマジャクシ取りなどとても伸び伸びと過ごしております。とても面白いのは、池の藻を取って、ワカメを取ったと喜んでいる姿や、ダンゴ虫を沢山取り、男の子も女の子も平気で掴んで、飼いたい、家に持っていきたいという姿です。

広い駐車スペース兼庭では、バドミントン、縄跳び、鬼ごっこ、スロープを利用したキックスケーター、三輪車遊び等ほんとに恵まれていると思います。

子供の発想力には度々驚かされます。大人では考え付かないことが次から次に出てきます。

広い場所に移ったことで大変なことは、子供が分散され、スタッフも分散され手が足りないこと。

そして、長期休校により、新一年生は全くと言っていいほど学校に行かずに学童での生活をしており、学力の問題もありますが、集団生活をしていくうえで身につけなければならないことが出来ていないと感じられます。今年度は新一年生がとても多いので、気になっています。一年生以外でも長期休校による弊害が沢山あると思いますが、学童で何ができるのかわからない状態で関わっております。

わたしは高齢者福祉・介護には長年関わってきましたが、子供に関わるのは初めてです。対人援助においては同じでも、高齢者と子供では全く違うと悩んでいます。

スタッフの質（知識・技術・人間性・経験）と量（十分な人員）が十分でないと満足した、やりがいのある仕事は出来ないと思っています。

まごころケア千葉

創立20周年記念行事開催

去る2月16日（日）　NPO法人まごころサービス千葉創立20周年に当たり記念懇親会を開催致しました。当日は現役会員の他、これまで支えて下さった先輩の方も交え総員30名の参加でした。会場は千葉市内のホテルで、これまでの歩みを振り返り、余興で脳トレ体操、カラオケ、ビンゴゲーム、思い出スピーチ等々、大いに盛り上がりました。

当法人のこれまでの歩みを紹介いたします。

平成2年8月、小野呈子氏（当時64歳故人）は、日本ケアシステム本部のご指導を賜り、「愛（やさしく）・忍耐（見守る）・技術（うまく）」を理念に掲げ、「私たちは親の愛に育まれ、社会の恩恵を受けて成人しました。このことに報いるため、まごころを込めて、お世話させていただきます」という想いで、協力者5人と高齢者・障がい者（児）への生活支援と介護の事業を立ち上げました。その後、大勢の良いヘルパーさんに恵まれ、地域で心のこもったケアを実践し、20周年を迎えることができました。心から感謝しています。

現在は、40代から80代の会員33名で、「まごころケアサービス」の他、介護保険事業、介護予防生活支援サービス事業、総合支援事業、子育て支援に従事しています。

次は、益々のケアのスキルアップを図り、25周年を目指します。

まごころケア にこにこ三豊

出産・子育

にこにこ観音寺デイサービス
管理者　池田　直子

にこにこ三豊にて勤務していた4年前「子供」という言葉は、わたしにとって重い言葉でした。晩婚だった私は、結婚して3年間子宝に恵まれず、高齢出産といわれる三十五歳にさしかかり、焦りや不安があった為です。

知人から良い病院があると聞き、週末ごとに車で40分かけて不妊治療専門の病院に通っていました。日時を指定されている通院の日には訪問介護の仕事を他の人に変わってもらい、早退させてもらうなど融通をして頂きました。仕事をしながら通院できたのは、周りの理解があってからこそだと思います。現在、不任治療の手術代は全て保険対象外ですが、とても高額であり（国や自治体から少し補助金が出るものの）その時点で治療を諦める人もいます。私も働いた給料はほとんど治療につぎ込んでいきました。

2年してやっと子供を授かることができました。嬉しかったです。産前は6週まで仕事をさせてもらいましたが、昼休み横になるなどし、先輩からは「無理はしないように」と仕事も軽くしていただくなど気遣っていただきました。

産後は、規定の8週の産休の後に育児休暇を9ヶ月とり復帰しました。復帰は考えていたほど甘くなく、毎日が飛ぶように過ぎていきました。核家族ですが、父母や夫の母に頼み子供の迎え、夕食など助けてもらいながら働いています。

子供が6ヶ月の頃から、また不妊治療を始めており、2年経った現在は第2子を妊娠中であり、観音寺デイサービスで働かせてもらっています。少子化政策と良く聞きますが、晩婚化が進んだ今、不任治療に国の保険がおりるようになれば、治療を諦める人も減ってくるのではないかと思います。

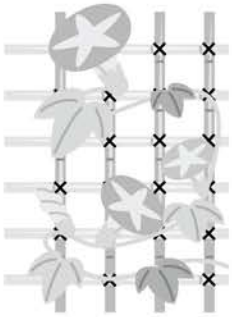
まごころサービス 徳島センター

新型コロナに負けない身体をつくりましょう

徳島センター　道辻　明子

新聞を見てもテレビを見ても新型コロナウイルスのニュースや暮らしの情報の中でどっぷりと入っていますが、訪問介護ＮＰＯボランティア活動や日常生活でも気持は引きしめてマスク不足や、手指消毒液も不足気味でしたが、今は手元にゆとりが出来ました。

まだまだ油断は出来ませんが明るい笑顔だけは忘れずにして新型コロナに負けない免疫力と栄養バランス・体操（筋力づくり）・睡眠・適度な遊びと助け合い・その他個性を大切にして世界の皆さんと一緒に頑張りましょう。



まごころケア ぽっかぽか川之江

やっと見つけた私の居場所

堤竹　牧子

「ママ、グループホームに行っていた時の方が楽しそうだったね。」子供の不意に出た一言にハッとしたのは、大規模デイサービスに務めて三年目のことでした。寝食を共にする生活の場であるグループホームとは違い、一日に五〇人近い利用者さんをお世話する大規模デイ。少しずつ私の軸とするものがブレてきていたのかもしれません。

「グループホームみたいなデイがあればいいな。」そんな私の言葉に「ピッタリのところがあるよ。」と友人が教えてくれたのが、今の「まごころはうす　かまやん」でした。

初めて見学に行ったとき、利用者さんがとても明るい笑顔で、何ともいえない温かい雰囲気に包まれていたのを覚えています。その中に一人、発声が出来ずに筆談をされる方がいらっしゃいました。何と声をかけたのか忘れましたが、「ここには心があります。」と書いて下さいました。私はその一言が決め手となり、スタッフの一人に加えて頂きました。

「ここは誰が来てくれてもいいんです。」との管理者の言葉通り、学校が休みの日にはスタッフの子供たちがおばあちゃん達にお茶を入れてくれます。隣接する駄菓子屋に買い物に来た子供たちが、おばあちゃんたちの作ったおむすびを貰いに来ます。最近では商店街を歩く通行人の方が、「いつもきれいにしているから、ここは皆さんお花が好きなんじゃないかと思って。」と、近所の八百屋さんで買った鉢植えを、わざわざ届けてくれたりしました。商店街を歩く人が、私たちの取り組みを好意的に見てくれている。そのことがスタッフにとっても嬉しい出来事でした。

子供やスタッフに将棋をおしえてくれるおじいちゃん、得意な畑仕事を教えてくれる六〇年前のイケメン軍団は、若いスタッフたちのへっぴり腰に苦笑いです。

そんな異世代の交流の中で、子供であろうと高齢者であろうと、人は『誰かの役に立っている』という実感が、その人らしく生きていく上でこの上なく大事なことであるのだと、つくづく感じるのです。

私の父も今年に入り週に一度の利用者となりました。まだ若く、自分は利用者ではなくスタッフの一人と思って通っています。働きながら父をみることに不安もありましたが、スタッフの皆さんのご協力と、『ここが一人でも多くの人の居場所になってもらえたら。』という温かい思いに支えられて、ありがたくも今まで見たことのない父の姿をみせて

もらっています。

「あなたはあなたのままで、ここにいてくれていいんですよ。」と、そんなメッセージが私の姿から感じてもらえる一人となりたい。それがここ、「まごころはうす　かまやん」で求められる人であると信じて、これからも失敗を重ねながらこの場所で成長していきたいと思います。

まごころケア西春日

これからの展望

センター長　笠井　圭介

みなさま、お変わりないでしょうか。最近は新型コロナウイルスの影響で、全てにおいて自粛ムードとなっていますね。自粛といえば、昭和六十三年（一九八八年）の後半、昭和天皇が病に伏しておられたため、いろいろなイベント等を中止する動きがありました。しかし、今回は伝染病の拡大を抑えるために自粛するという未曽有の事態です。いつになったら終わるのかという不安な空気が漂い、経済にも大きな影響を与えています。人々が旅行や仕事で外出し、お金をたくさん使うことで世の中を支えていたことを改めて実感しました。

まごころケア西春日では、玄関の自動ドアを手動にし、来訪者に体温測定やアルコール消毒をお願いするなどの対策をしながら運営を行ってきました。訪問サービスも感染防止のために自粛してはという意見も出ましたが、独居の高齢者の方も多数おられるので、休止することによってその方々の心身機能が低下してはいけないということで、今日まで続けています。（もちろん中には自主的に休まれている方もおられるので、人数は感染前よりは少ないですが…）

これからも地域の方々のために貢献していきたいと考えています。今はコロナウイルスのため、イベント等は自粛させていただいていますが、終息すればまた以前のようにボランティアの方々に来ていただき、楽しい催しを行っていきたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

※写真は、今年の新年会の時の様子です。早くこのような行事を再開させたいですね。

まごころケア高松

「コロナ」と「うどん」

管理者　福家　茂雄

皆様お身体お気をつけてお過ごしですか？おそらく、どのセンターさんからも「新型コロナウイルス」関係のお便りが多いと思います。こちらからも一つ。私たちの切なる悲鳴を聞いて下さい。

皆様、コロナ拡大予防として「自粛」されていたと思います。といってもまごころの活動の大半は外に出ないわけにはいかない。人とも接する、密室の場合もある、難聴の方との会話なら大声も出さざるを得ない。そのような状況下で、自分たちがウイルスを拡散するようなことになったら大変です。だから、極力そのようにならないよう緊急事態の解除後の今も常に、不要・不急の外出は控えています。

ここからが本題。わが県は全国に知れたる「うどん県」。なんせコンビニよりも多いうどん屋が軒を競っています。平日の昼間、うどん屋の前は店に入れない人たちの行列は過

密状態で延々と続いていました。まるで遊園地の人気ジェットコースターに乗るための順番待ちの様でした。

県民にとって「うどん」はいつでも食べられる、いやいつでも食べられないといけない食事。職場で昼休みの外食を終えて帰ってきた時「何食べた?」と聞かれた時「うどん」と答えたら皆から「何言ってるの」の視線を浴びせられます。「それはわかっている、当たり前。何うどんを食べたのという意味」なのです。

若い男の子が恋人に「ごはんしようか」と声掛けたら行先は「うどん屋」。中年のおじさんたちが「おでんで一杯行こうか」との声かけも行き先はやはり「うどん屋」というほど定着しています。

他県の皆様の感覚の何に近いか考えました。それは「みそ汁」です。毎日1杯程度召し上がるでしょうし、白いご飯の時には当然あるものではないでしょうか?それが何日も口にできないのです。

それだけ愛され、必要とされ、軒を連ねていた多くの店が「自粛」してしまったのです。夜の繁華街どころの騒ぎではありません。手軽な食事、ちょっとした交流の場が閉まってしまったのです。もちろん自宅でも食べられるし腹は満たされます。でもやはり違うのです。

「セルフ」のお店で自分が作って食べても「外食」なのです。もちろんコロナ流行警戒宣言が出されていた時も開いているところも少ないですがありました。でもそこに行くには後ろめたさがありました。

誰かが咳でもしていたら飛び出さないといけない。空いている席に座っても隣に誰か来たら、と思うと入店は止めてコンビニのパンで済ましてしまいました。なによりもうどん屋へ行けない満たされない感がいっぱいでした。

今、やっとそのうどん屋がソーシャルディスタンスやそれぞれの対策をとりながら徐々に再開してきています。もう少しです、このリーズナブルで手軽な県民食、皆様も是非食べに来てください。お待ちしています。

マスク作り

高松センター敷地内に「まごころハウス」があるのをご存じですか。居場所つくりとして地域の高齢者の皆様が曜日を決めて集まり、正に自主的に運営され小物を作ったり、お茶を飲んだりお話しされたりして過ごされている場所です。

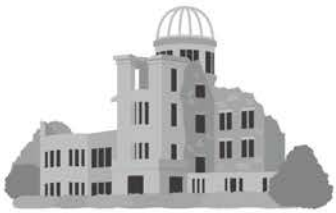
しかしここの活動も「コロナウイルス感染予防」のため大勢での利用は自粛することになりました。その間、感染拡大に留意しながら「まごころハウス」を利用したのが中学二年と一年の女子生徒。この二人の学校が閉じられ、一人で留守番しなければならなくなった子供達で「まごころ」のスタッフの家族です。

親御さん達がまごころに出勤する時一緒にこの「まごころハウス」にきて勉強したり、外で遊んだりしていました。そこで、彼女たちはこの場所を貸して下さっているお礼に、また今ある時間と場所で自分たちの力で何か出来ないかを考え作ったのがこの手作りマスクです。さっそく照れながらスタッフ一人ひとりに感謝の心を込めて手渡して行きました。

今は、彼女たちも学校生活が始まり「まごころハウス」も本来の活動に戻ります。とはいえコロナウイルスによる感染の脅威が全て解決したわけではないので、感染予防に努めながら新しい生活様式でスタートします。

寄稿「戦争体験を継ぐ」

寄稿者：野上　さくら



太平洋戦争が終わり今年の夏で 75 年を迎えようとしています。実際に戦場に赴いた方々はもとより、子供時代に戦争を体験された方々も徐々に少なくなりつつあります。

これらの記憶を風化させることなく後世に語り継ごうと、高校の卒業研究（卒業プロジェクト）のテーマとして取り組んだ研究成果をシリーズでご紹介します。

第二章　戦争資料館・展示からの学び

- 二章のはじめに
- 「誰もおらんやないか」
- 「クラスター爆弾」
- 「広島のお弁当箱」
- 「加害者意識初体験」
- 記録写真

二章のはじめに

「戦争体験を継ぐ」活動をする前に、まずは自分自身が第二次世界大戦について学ぶ必要があった。だから私は歴史の教科書を読むことから始めた…かったのだが、無理であった。読み始めると睡魔が襲い逆に卒プロを妨げたのだ。そこで私は本から学ぶことはやめ、戦争資料館を何箇所も巡ることにした。

- ピースおおさか
- 立命館大学国際平和ミュージアム
- 高知「草の家」
- 広島平和記念資料館
- 長崎記念資料館
- 本川小学校資料館
- 袋町小学校資料館

訪れるたび、私はどんどん変化していった。理解していたはずのものが、本当は理解していなかったということに気づいた。モノが語る、モノからメッセージを得るということを初めて感じた。それは強烈なものだった。

……。

私たち人間が行ってきた数々の悲惨で、残酷で、酷い行い。その現実を見るのは辛かった。「戦争体験を継ぐ」というテーマに決めた時、それなりの苦悩は覚悟したがやっぱり苦しかった。高校2年生の私がそこまでする必要はなかったかもしれない。しかし、なぜか私は唇を噛んで涙をこらえながら見た。

この章ではそんな私が見たものから学んだことをまとめた。

「誰もおらんやないか」

高校二年生の十一月十日、大阪府の「ピースおおさか」という戦争資料館を訪れた。大阪大空襲の記録を集めて、展示している。内容より前に私は言いたいことがあった。それは館内で会ったのが見回りの警備員さん一人だったことだ。現代日本人が戦争という過去に無関心であるというのは、自身も経験していることであり、予想はしていた。しかし、休日に私を含めて数人というのはあまりにも少なすぎると感じた。私たち日本人の無関心さが目に見える形で現れていた。

それにしても薄暗い照明と爆撃音の中、戦時中の写真や物の間をじっくり進むわけである。「感じる必要のない恐怖まで味わった」という気分だった。きわめつけは防空壕の体

験ができるコーナーだ。

防空壕を再現した小さな部屋のような場所に入ると戦闘機が上を飛ぶ音や、爆弾の落ちる音、それから女性が叫ぶ声、男性が「早く逃げろ！」と叫んでいる声、建物などが崩れるような音がスピーカーから聞こえて来た。防空壕の入り口の階段の上からは赤い日の色が漏れている。再現だとわかっていても恐ろしかった。そして何より、私よりもずっと小さな子たちが実際に爆音や振動、熱を感じ、本当に死ぬかもしれないと思っていたのかと思うと苦しかった。周りに人がいなかったので遠慮なく泣いた。

その数日後訪れた資料館にも人がいなかった。静かだった。誰もいない資料館の壁にかかった写真の中の悲しそうな少女に見つめられながら、「私は何も知らないのだ」ということを知った。

私たちはあまりにも過去に犯したことについて知らない。知ろうとしていないのかもしれない。こんなに多くの情報を用意してくれている資料館があるのに、誰も来ていないのだから。興味がないのである。

戦争資料館に誰もいないということは、実は危険なことではないかと私は感じた。その静かで誰もいない薄暗い資料館に「子どももしっかりと自分の目で周りを見て生きていきなさい。」「誰かが教えてくれるのを待っていては、何も知ることはできない。」と言われた気がした。

今までの卒プロ期間中、良い人、悪い人、賢い人、愚かな人、も私に大切なことを教えてくれたのは過去の過ちを見ようとしない賢くて良い人ではない方の人々の存在だった。

「クラスター爆弾」

あの日、私は国際平和ミュージアムを訪れた。そこで見た一つの小さな爆弾の説明、そして横にちょこんと展示されていたレプリカに私は釘付けになった。クラスター爆弾と呼ばれる野球ボールぐらいの爆弾である。中には小さなビービー弾ぐらいの鉄球が３００個ほど入っている。その鉄球は爆発すると周囲に飛び散り、人体に食い込むように計算されている。解説文には「一気に多くの人を殺すことを目的に、ベトナム戦争のときにアメリカ軍が使用した（現在は国際条約により使用禁止となった）」また「開発が進むと、小さな鉄球の代わりにプラスチック製の珠を入るようになった。プラスチックがレントゲンに映りにくいことを利用し、治療を困難にさせるためだ」とあった。

どうかしていると思った。「どうやったらより多くの人を殺せるか」だって?!本当にどうかしている。これが戦争ということなのだろうか。小さな爆弾に戦争の正体を見せられた気がした。

私たちは隣の人のことがどれだけ気に入らなくても「あの人をどうやったら苦しんで殺せるだろうか」

などと考えたりしない。それなのに、戦争になった途端顔も知らない相手、話してみればとても気の合うかもしれない人たちを「どれだけ多く殺せるか」一生懸命考えるのだ。そして、その兵器を用いてどれだけ多くの人を殺そうと犯罪となることはない。

しばらく経った後、落ち着いて考えてみた。すると、また違った疑問も生まれた。

「あの爆弾を作った人は誰だろう？その人は本当に人を殺したかったのだろうか？」

「あの爆弾を落とした兵士は本当にこんなことをしたくないと思ってはいなかっただろうか？」

この爆弾の開発者が本当は人を殺すための開発などしたくないと思っていたとしたら。戦闘機のパイロットは本当は嫌だと言いたかったとしたら。彼らは生きるために、自分自身の感情を押し殺すしかなかったのだとしたら…。

殺したくないのに殺さざるえないという状況は十分起こりうる。そして、したくなかった人殺しであったとしても、それはその人自身の罪と

なる。しなくて良いはずの悲しい殺し合いは、誰かの愛する人の命を奪い、子ども達の未来を奪い、続けるうち本当の憎しみを生み出す。

そんなことがこの世界で起こっていいのだろうか。

「見て見ぬ振りはもうできない」と思った。

「広島のお弁当」

高校二年生の冬、私は広島の平和記念館で黒焦げになったお弁当箱を見た。そのお弁当箱には真っ黒のお米が詰まっていた。お弁当の持ち主である中学生は、自分の畑で初めてできた野菜を使ったおかずが入っており、楽しみに家を出たという。しかしそのお弁当はついに食べられることはなかった。

私は「お弁当食べたかっただろうなぁ。せめて一口だけでも食べることができたら……。」と思った。お弁当ぐらい食べさせてくれてもいいのに。原爆はちょっとした楽しみや当たり前の喜びまでも奪ってしまうのだ。原爆はある中学生がお弁当を食べるその直前に落ちるのだ。

このお弁当は戦争というのは、私たちが現在生きている中では見逃しそうなぐらいのちょっとした楽しみやささやかな幸せを奪っていくものなのだと教えてくれた。それは今まで想像していたグロテスクな残酷さではなかった。しかし、その小さな幸せを奪われることが、どれだけ悲しくて残酷なことなのかということを思い知ったのだ。

それまでの私の感覚は大きく変わった。

「ある中学生が楽しみにしていたお弁当を食べることができない」、これこそが戦争なのである。

戦争が残すものは何もない。頭の中でなく、本当の意味で、感覚として理解した。

「加害者意識初体験」

三月の終、初めて日本人でいることが恥ずかしいと思った。中央図書館のかんなびギャラリーの従軍慰安婦の写真展に行ったのだ。目を背けたくなるような展示もあった。しかし、日本人である限り私たちは目を背けてはいけない。正面からしっかりと見る義務があるとさえ思った。

従軍慰安婦とは戦時中、旧日本軍が作った慰安所で、性の相手を強いられた女性たちのことである。韓国、北朝鮮、中国、フィリピン、ビルマ（ミャンマー）、マレーシア、インドネシア。これらの国々の女性たちを無理やり働かせた。その中にはまだ大人になりきっていない少女たちもいた。

見た映像の中で、ある女性はこう証言する。

「当時十三歳だったにも関わらず、無理やり連れて行かれた。体はまだ育ちきっていなかった。苦痛だった。痛かった。」

十三歳。私は今十八だから五歳も年下だ。私たち日本人はそんな子どもになんてひどいことをしたんだろう。また、こんな女性もいた。

「毎日軍人が三人ぐらい来た。その人たちは入る前に店の前に貼ってある写真を見て、選んで来るんだ。私は、両手両足を竹の棒に縛られ、全く抵抗することができなかった」

「軍人と寝る前に強いお酒のようなものを飲まされ、妊娠しないようにする。それでも妊娠した人もいるし、

私は妊娠しなかったけど欲しいときも子どもはできなかった」

インタビューの途中で頭を抱えしばらく黙っている姿もあった。胸が詰まる。

こんなことをした日本人がいる。申し訳ないでは済まされない。日本人であることが恥ずかしくなった。

しかし、それほどの衝撃を受けたにも関わらず、どうしても自分ごととして考えることができなかった。私はこれにとても焦った。頭では理解してるつもりなのに、感覚がどうしてもついてこないのだ。私の育った環境、私を育ててくれる親、学校の先生たちが悪いのだということにしようと思った、けれども、他人事として写真を見ている私に加えて、人のせいにしようとしている私。自分自身にますます腹が立った。

本当の意味で日本人が犯してきたことを理解したと言える自信はない。理解したのは頭だけかもしれない。それでも、あの日あの写真展に行った意味はあった。加害者という立場から戦争展を見たのは初めてだったが、私たち日本人は加害者意識を持つことが必要であると確信した。それは「今すぐ反省しなければいけない」とか「全ては私たち日本人のせいだ」などと思わなければいけないということではない。ただ、黙って正面から向き合い、逃げてはいけない、ましてなかったことになど決してしてはいけない、そういうことだ。

そしてその上で、だからこそその上を向いて進んでいきたい。これから、そんなことが二度と起こらないように、そんな社会を作っていくのは、私達なのだから。

記念写真

JMS（日本ケアシステム協会）事務局通信

令和2年夏号をお届けします。今回も会員皆様方から各センターの活動状況などお寄せいただき、ありがとうございました。

まず初めに令和2年度理事会並びに定時総会の書面議決の結果についてご報告申し上げます。

本年度総会につきましては、新型コロナウイルスによる感染予防の観点から総会を中止せざるを得ない状況となり、左記議案について書面にてご審議いただきました。

第1号議案　令和元年度事業報告並びに活動決算報告

第2号議案　令和2年度事業計画並びに活動予算

第3号議案　令和2年度会費・保険料

以上議案について、皆様から返答を頂いた結果、理事会（理事、監事総数8名）としては、第1、第2、第3号議案とも満場一致で賛成。総会（正会員総数18団体）については、第1号議案は満場一致で賛成。2号、3号議案は1団体以外17団体の賛成のご返答があり理事会、総会とも承認可決となりました。以上ご報告申し上げます。

政府は去る6月19日、国民に対し自粛を要請していた都道府県をまたぐ移動を全面解除しました。

新型コロナウイルスによる感染者は3月以降全国に広がり、政府は緊急事態宣言を発出し、様々な経済活動の自粛や外出自粛の要請を行ってきました。

4月7日：7都道府県に緊急事態宣言

4月16日：緊急事態宣言を全国に拡大

5月14日：新規感染者数の少ない39県の宣言を解除

5月21日：近畿3府県の宣言を解除

5月25日：残る5都道府県の宣言を解除

以上がその時系列の概要ですが、この間5月のゴールデンウィークの行楽シーズンを多くの人が自宅で過ごすという異常事態となり、様々な業界で経済が低迷し、また休校により子供たちの教育の遅れが懸念されるなど、そのたて直しに課題が山積しています。

県をまたぐ移動が解除され、様々な経済活動が再開されているとはいえ、人の行き来が増えれば感染拡大のリスクは当然高まります。専門家は感染が広がった場合は再び移動の自粛要請に踏み切ることが必要で、感染拡大をいかに早く察知するかだと指摘しています。

私たちが注意すべきは、専門家が口をそろえて言われている、手洗い、マスクの着用、3密の回避が肝心なのでしょう。また、専門者は、県境をまたいでの移動は、自らの住所と行き先の過去2週間の流行状況を確認し、いずれかの地域の感染拡大が確認されたら無理をして行かないことです。と呼びかけています。

また、これから暑い夏を迎えるにあたりコロナウイルスによる感染予防のための「新しい生活様式」における熱中症予防が重要な課題となっています。

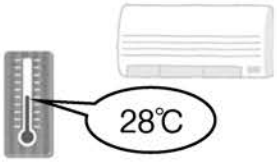
詳しくは厚労省のホームページで公表していますのでご参照ください。

1　マスクの着用

マスクの着用時は心拍数、呼吸数、血中二酸化炭素濃度、体温が上昇し、体への負担が大きくなります。屋外で2メートル以上距離が取れるときはマスクを外しましょう。マスク着用時は、負荷の大きい作業や運動を避け、こまめに水分補給をしましょう。

2　エアコンの使用

熱中症予防にエアコンの活用は有効です。でも一般家庭用エアコンは換気を行っていないので、窓を開放したり換気扇で換気しましょう。そのため設定温度をすこし下げましょう。



3　涼しい場所への移動

体調に異変を感じたら、速やかに涼しい店舗などや風通しの良い場所へ移動しましょう。

4　日頃の健康管理

毎朝定時の体温測定、健康チェックをしましょう。自分の平熱を知っておくことは発熱に早く気づけます。

介護保険業務の
様々なご要望にお答えします

介護保険トータルシステム「Rely Ⅱ」

株式会社
アール・シー・エス

高松市錦町２丁目２番17号
西日本放送錦町ビル
TEL：(087) 804-8811
FAX：(087) 826-5010

はじめまして
まいたうんメール便です
高松メールセンターからのご案内
メール便… ハガキ 封書 カタログ など
激安価格で配達します
お問い合わせはこちらから
四国メールネットワーク協同組合
(有)タウンネット 高松メールセンター
高松市朝日町4丁目10番60号
TEL.087-813-0426 FAX.087-813-0436
E-mail takamatsu@carol.ocn.ne.jp
http://www.shikoku-mp.com/

www.sanuki-taberu.net
株式会社 ウエイ企画 〒760-0062香川県高松市塩上町7-2
TEL：087-837-1159 | FAX：087-897-3007
コーポレートサイト http://www.network-way.com

あいおいニッセイ同和損保代理店

㈱フリーエージェント

八田 和忠

＊損保・生保・社会保険労務士＊
扱っています。

高松市伏石町 2028–2
TEL 087–816–8123
FAX 087–815–1171

ハイエース・シエンタ・エスクァイアなど
福祉車両のことなら
香川トヨペットにお任せください！

Welcab

香川トヨペット
定休日 月曜日 本社／高松市香西南町577-2
https://www.kagawa-toyopet.com/

詳しくは香川トヨペットまでご連絡ください。
087-882-5561

総合印刷・イベント事業・マニュアル制作
デジタルコンテンツ企画制作

SEIKO-SHA
株式会社 高松 東京
成光社
〒760-0065 高松市朝日町5-14-2
TEL 087-823-0222 FAX 087-823-0211
www.seiko-sha.co.jp

実務者養成施設

介護福祉士実務者研修＜通信課程＞

★4月から翌年３月まで毎月受付
「年12コース」各コース定員24名
★全国どこからでも応募できます
★スクリーング（通学）は
「医療的ケア演習」を含み6.5日間

【照会先】 ラポールカレッジ 研修所 / 事務局
TEL 087-815-0760
〒761-8052 高松市松並町 802 番地 1/ 日本ケアシステム協会内
駐車場有り（無料）/ 宿泊 1,000 円～

地域とともにこれからも。

香川銀行
トモニホールディングス

消防設備士の店

四国防災設備有限会社

消防設備保守点検

〒761-0612 香川県木田郡三木町氷上1833-6番地
TEL(087)898–3913
FAX(087)898–8801

ご利用ください。

● E-mail（電子メール）●
magokoro@hyper.ocn.ne.jp

● URL（ホームページ）●
http://www.jp-care.gr.jp

編集後記

梅雨の時期がやってきたかと思えば、もう真夏のような暑い日が続いております。今年はお祭り等も中止になってしまいましたが、コロナウイルスが第二波、第三波と続くことがないようにもう少し、あと少しという思いで皆様頑張っておられるかと思います。

医療従事者の皆様をはじめウイルスと闘い続けながら働いてくださる皆様に感謝しています。１日でも早く以前のような生活に戻れるよう、感染防止対策に努めたいと思います。どうか体調にお気をつけて、お元気にお過ごしいただけますよう、またご活躍をお祈りいたします。

全国まごころケアネット
特定非営利活動法人 日本ケアシステム協会

まごころケアサービスセンター

センターの名称	住　所	Eメール	TEL	FAX
本　部	〒761-8052 香川県高松市松並町802番地1	magokoro@hyper.ocn.ne.jp	087-815-0771	087-815-0773
まごころケア旭川	〒070-0037 北海道旭川市7条通8丁目セントラル7条ビル202号室	magokolo@tmt.ne.jp	0166-26-8639	0166-74-3172
まごころケア塩釜	〒985-0043 宮城県塩釜市袖野田町39-2	jmss@cocoa.ocn.ne.jp	022-362-2030	022-362-3303
まごころケアサービス 福島センター	〒960-2262 福島県福島市在庭坂宇南林60-2	magokoro@safins.ne.jp	024-573-7539	024-591-5441
まごころケアサービス 二本松センター	〒964-0903 福島県二本松市根崎1-9	kuwabara.masaaki@ivory.plala.or.jp	0243-22-0112	0243-22-0112
まごころケア国見	〒969-1761 福島県伊達郡国見町大字藤田字南54-2	magokoro923@yahoo.co.jp	024-585-5923	024-585-5924
まごころケア千葉	〒262-0033 千葉県千葉市花見川区幕張本郷1-23-15 グランドゥール第2 107号	magokoro12315@nifty.com	043-274-9711	043-274-9718
まごころケア京田辺	〒610-0331 京都府京田辺市田辺北川44番地	sqkg13630@leto.eonet.ne.jp	0774-64-3722	0774-64-3722
まごころサービス 岡山センター	〒703-8232 岡山県岡山市中区関19番地1	magokoronowa@mx4.et.tiki.ne.jp	086-278-2926	086-278-2966
まごころサービス 倉敷センター	〒706-0001 岡山県玉野市田井3-12-18	rappyon@lime.ocn.ne.jp	0863-31-6640	0863-31-5110
まごころケア高松	〒761-8052 香川県高松市松並町802番地1	magokoro@hyper.ocn.ne.jp	087-865-8001	087-865-8039
まごころケア国分寺	〒769-0102 香川県高松市国分寺町国分1284-1	ajisai@eagle.ocn.ne.jp	087-874-6625	087-874-6685
まごころケアにこにこ三豊	〒767-0001 香川県三豊市高瀬町上高瀬1883-1	nikoniko-mitoyo@shirt.ocn.ne.jp	0875-73-6750	0875-73-6751
まごころケア丸亀	〒765-0032 香川県善通寺市原田町1317-7	tyusan.n-377-p4376-o@wing.ocn.ne.jp	0877-64-0278	0877-64-0279
まごころケア屋島やすらぎ	〒761-0111 香川県高松市屋島東町1414	ma11ka1584yasuragi@swan.ocn.ne.jp	087-843-9590	087-841-3853
まごころケアサービス 大川センター	〒761-0904 香川県さぬき市大川町田面1198	okawa@samariya.or.jp	0879-43-3191	0879-23-2712
まごころケア西春日	〒761-8051 香川県高松市西春日町1510番地1	keisuke64kasai@gmail.com	087-869-1165	087-869-1195
まごころサービス 徳島センター	〒770-0923 徳島県徳島市大道3丁目22-1	magokoro@coral.plala.or.jp	088-624-6578	088-624-6585
まごころケア ぽっかぽか川之江	〒799-0101 愛媛県四国中央市川之江町1660-1	tani280610@yahoo.co.jp	0896-59-1150	0896-59-1150

「日本ケアシステム協会」会報
令和2年7月1日　発行No.152

発　行　所　〒761-8052 高松市松並町802番地1
TEL087-815-0771　FAX087-815-0773
編集発行人　兼間　道子
郵便振替　口座番号 01610-0-92689
印　刷　所　(株)成光社

まごころケア高松
NPO法人 長寿社会支援協会

〒761-8052 高松市松並町802番地1
TEL087-865-8001 FAX087-865-8039
E-mail　magokoro@hyper.ocn.ne.jp
URL　http://cho-jyu.info/